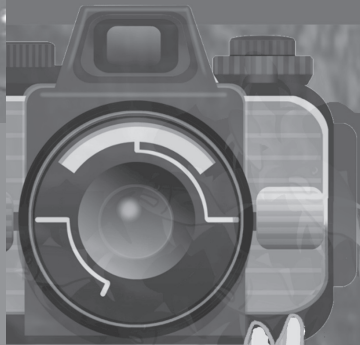
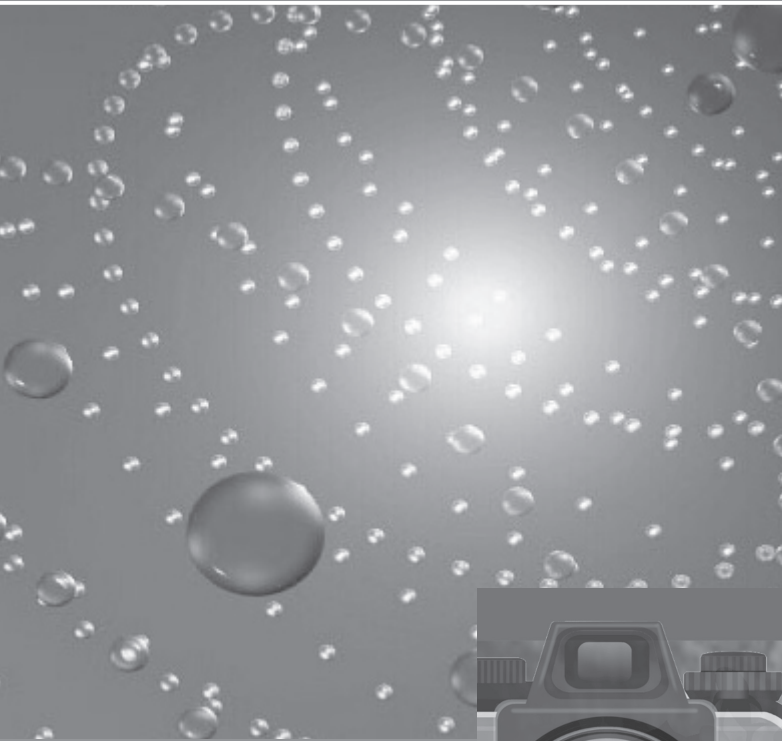


Underwater Photography Speciality



underwater
photo



友達に水中世界を紹介しよう

少し前まで、水中写真といえばお金がかかる、高度なテクニックが必要などのイメージがあったのですが、現在では初心者でも簡単に使える小型カメラやデジタルカメラ等の普及によって、誰でも簡単に水中写真を撮影することが出来るようになりました。

アンダーウォーターフォトグラフィースペシャリティーでは、このように簡単に使える水中撮影器材を使って、水中写真撮影の基礎をマスターします。水中の魅力的な写真を撮影して、たくさんの人に水中世界を紹介しましょう！



認定カード

この講習を修了すると、アンダーウォーターフォトグラフィースペシャルティ
認定カードを取得することができます。

この認定カードは、あなたがアンダーウォーターフォトグラフィーに関する十分
な知識や技術を持つことを証明するものです。

ダイビングにでかけるときには忘れずに持っていきましょう。

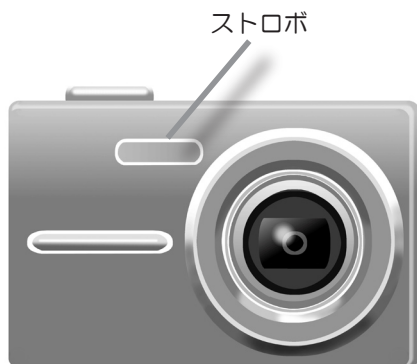


アンダーウォーターフォトグラフィースペシャルティ
認定カード

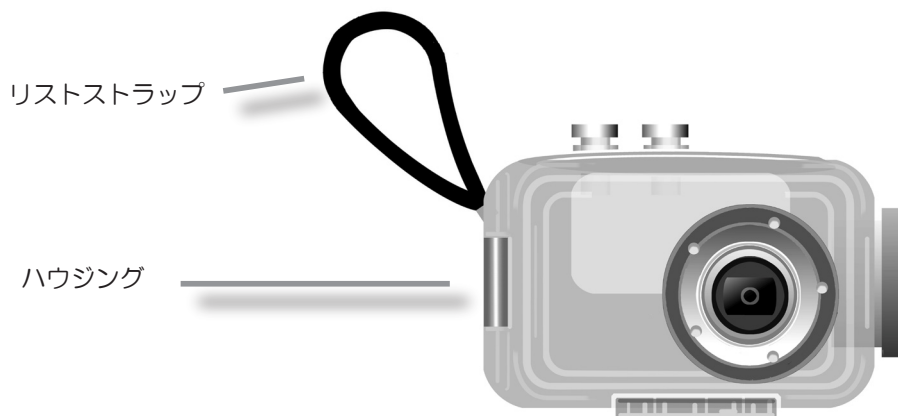
器材

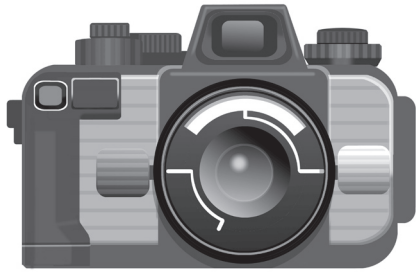
カメラには、フィルム式カメラとデジタルカメラがあります。
アンダーウォーターフォトグラフィースペシャルティークースでは、簡単に撮影
ができ、水中への持ち運びにも便利なデジタルカメラを使って水中写真撮影の基
礎をマスターします。

デジタルカメラは、ハウジングと呼ばれる完全に防水されたケースに入れて使用
します。

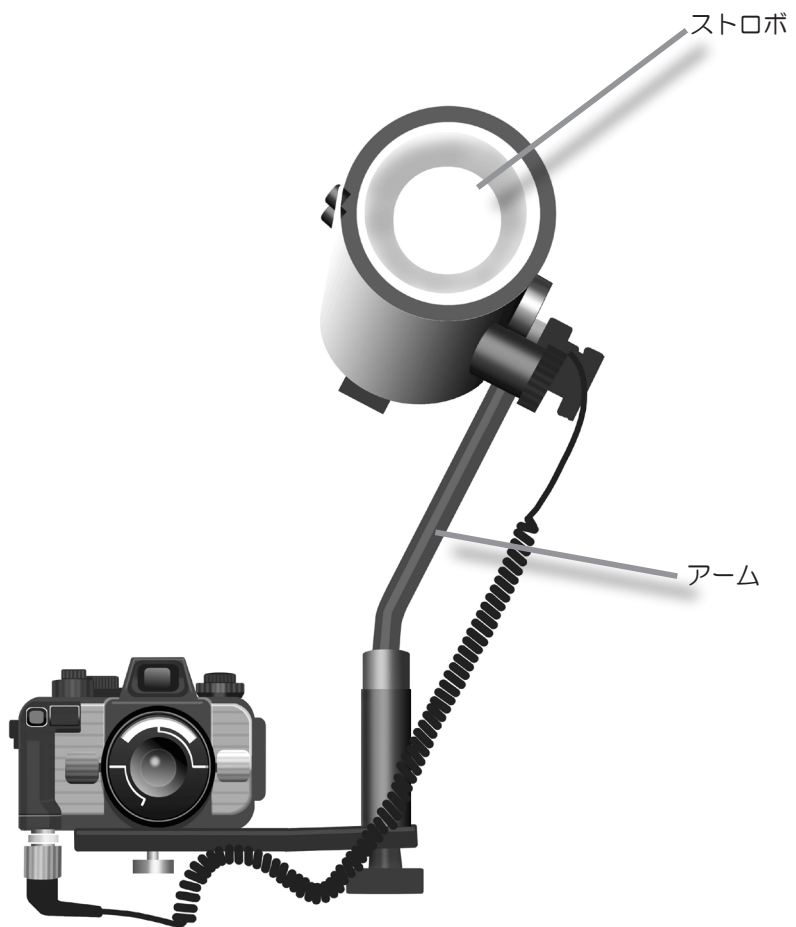


デジタルカメラ





フィルム式カメラ



デジタルカメラのセッティング

■セッティング前の準備

電池やバッテリーの充電をおこない、記録メディアをデジタルカメラにセットします。

■ハウジングにセットする

ハウジングのOリングに、ほんの小さなゴミや髪の毛などが付着するだけで機密性が失われてそこから水没します。

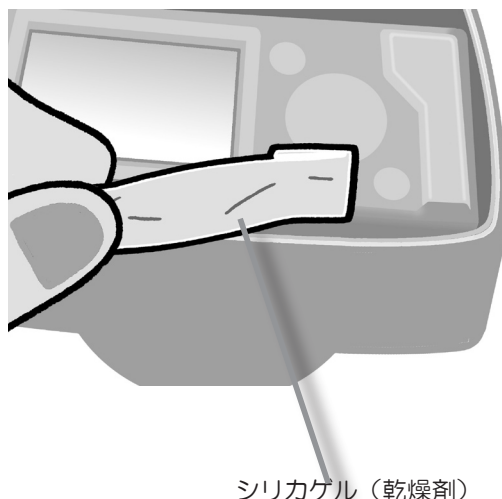
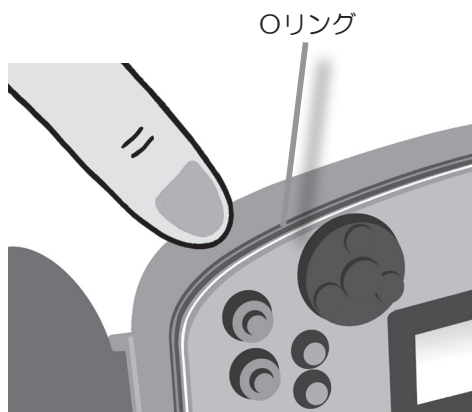
ハウジングの開閉時や、カメラをハウジングにセットする際には充分注意しましょう。

デジタルカメラは熱を発生するので、ハウジング内の湿度が高くとカメラのレンズが曇ってしまうことがあります。

デジタルカメラをセッティングする際に、小さなシリカゲルをハウジングに入れておきます。

セットが終わったら、浸水テストを行いましょう。

30秒ほど水道水に浸けて、ハウジングの合わせ目から気泡が出ていないか？ボタンは操作できるか？などを確認しましょう。



手入れ

ダイビングが終了したらカメラ（ハウジング）に付着した海水が乾かないうちにすぐに真水につけます。そのままの状態をよくゆすいだ後、30分以上真水につけてください。



すぐに真水に

水から上げたらタオルでよく水気をふきとり、完全に乾かしてからハウジングを開けます。

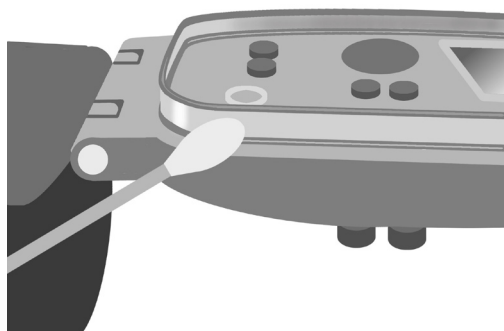
Oリングの手入れも必ずおこなってください。

まず、Oリングを傷つけないようにハウジングからはずし、やわらかい布などで拭きます。



Oリングにはグリスを薄く塗ろう

ハウジング側のOリングの溝もきれいに拭いた後、グリスを薄く塗ったOリングをもとに戻します。



Oリングの溝は綿棒でそうじ

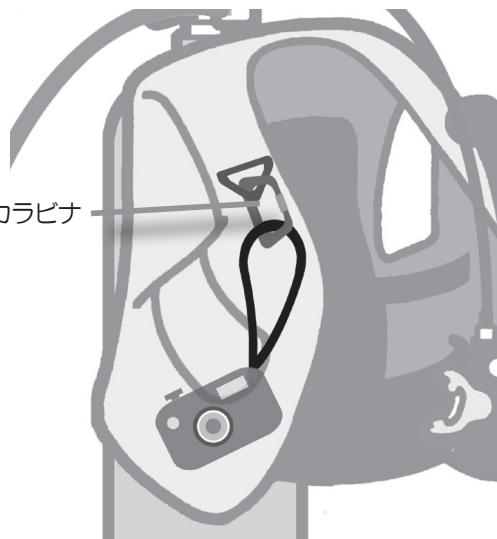
ダイビングテクニック

■ビーチエントリー

ハウジングが小さいデジタルカメラは、両手が自由に使えるように、できればBCのポケットに入れてエントリーしましょう。

ハウジングとBCはストラップとカラビナなどでつなげておくと、もしもカメラがポケットから出てしまった時でも紛失の心配がありません。

ハウジングのストラップは、潜降後、着底してから自分の手首に付け替えます。

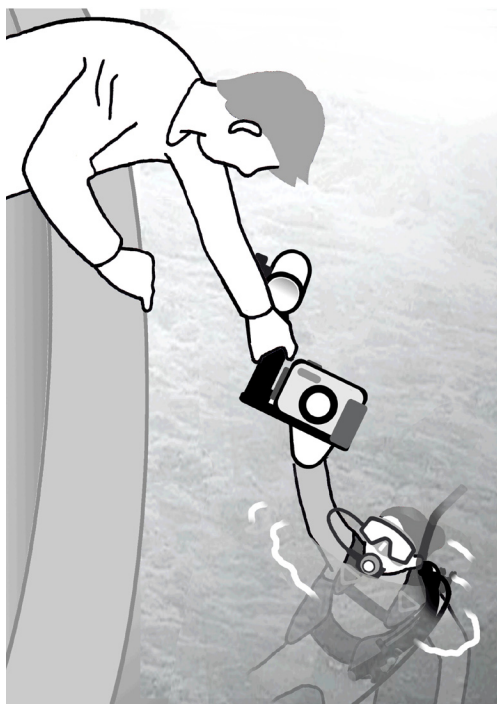


ハウジングとBCはつなげておこう

■ボートエントリー

ハウジングは水圧に対して強くできていますが、瞬間的にかかる衝撃には弱く、衝撃によって水没することがあります。

ボートダイビングなど高い場所からのエントリーで、カメラに衝撃を与えるような場合には、エントリーした後に船上にいる人に手渡ししてもらうようにしましょう。



■呼吸

特に初心者の場合、水中写真を撮影していると通常のダイビングに比べ空気の消費が早くなります。

無意識に呼吸を止めてしまったり、興奮して呼吸が乱れることがないように、リラックスした状態で撮影を行いましょう。



■浮力コントロール

はじめての水中写真撮影では、夢中になりすぎてフィンでサンゴを蹴って折ってしまったり、水底を荒らしてしまったりすることがあります。

浮力コントロールや水底でのバランスには充分注意しましょう。

ボイアンシースペシャリティークースに参加して、浮力コントロールを確実にマスターすることもおすすめです。



器材や足ひれでサンゴなどを傷つけないで

■安全管理

水中写真撮影のためにダイビングコンピューターを無視したり、残圧チェックを怠ることのないよう、安全管理には十分気をつけましょう。



水中写真撮影のテクニック

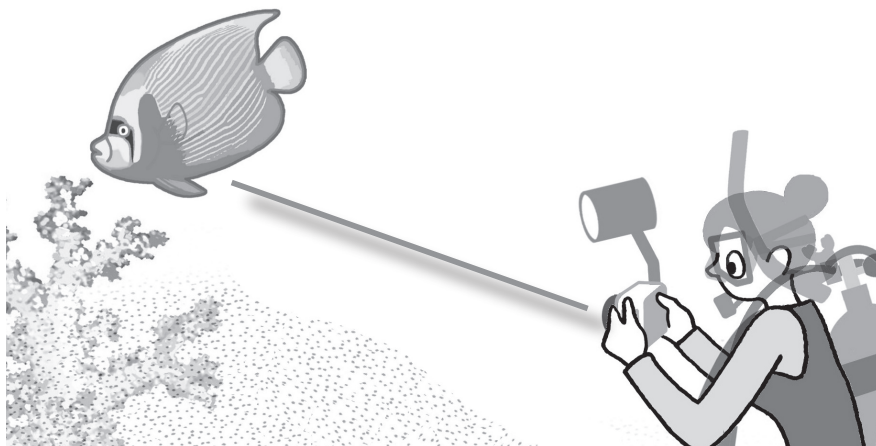
■透視度と撮影可能な距離

撮影可能な距離は透視度により変わります。

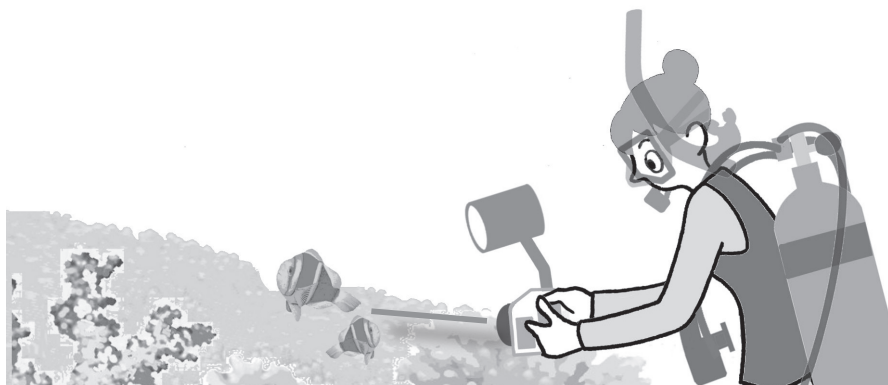
透視度はダイビングポイントの海底の状態（サンゴ礁、岩場、泥、砂）により異なります。

カメラと被写体の距離が近くなるほど鮮明な写真が撮影できますが、カメラと被写体との距離が透視度の 1/2 の距離であれば撮影可能です。

また、水中生物を被写体とする場合は 1m 以内、人物を被写体とする場合は 3m 以内が普通です。

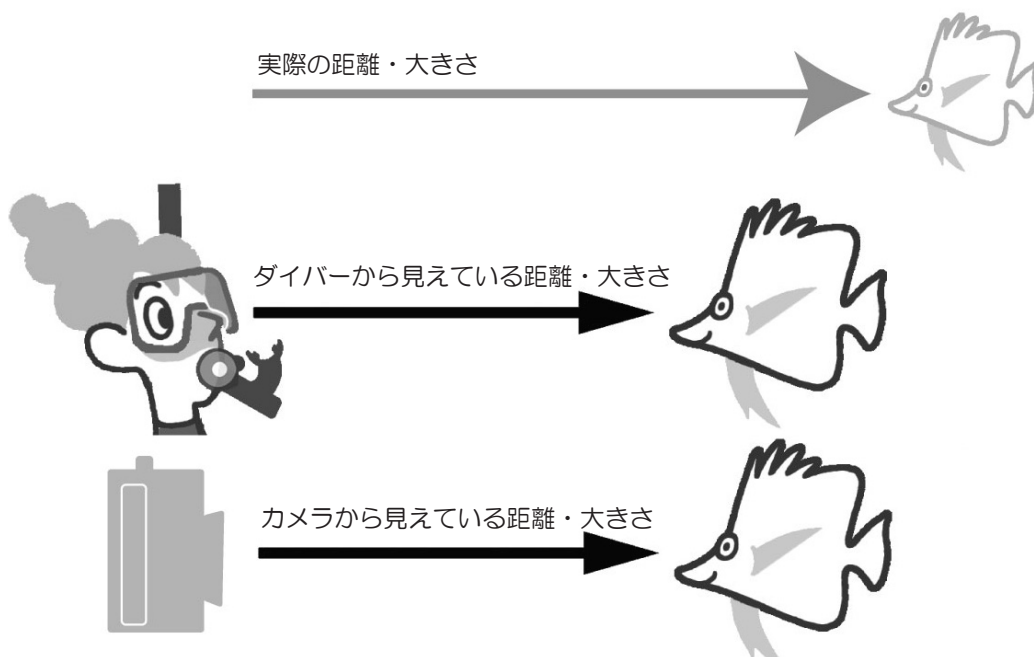


透視度が悪い場合でも被写体までの距離を 30cm 以内に近づければ撮影は可能です。



■距離のセット

水中カメラは、ダイバーと同じように、3分の4倍、大きく近く見えています。



そのため、ピントを合わせる必要があるカメラの場合は、実際に測った距離をセットするとピンボケの写真になってしまいます。

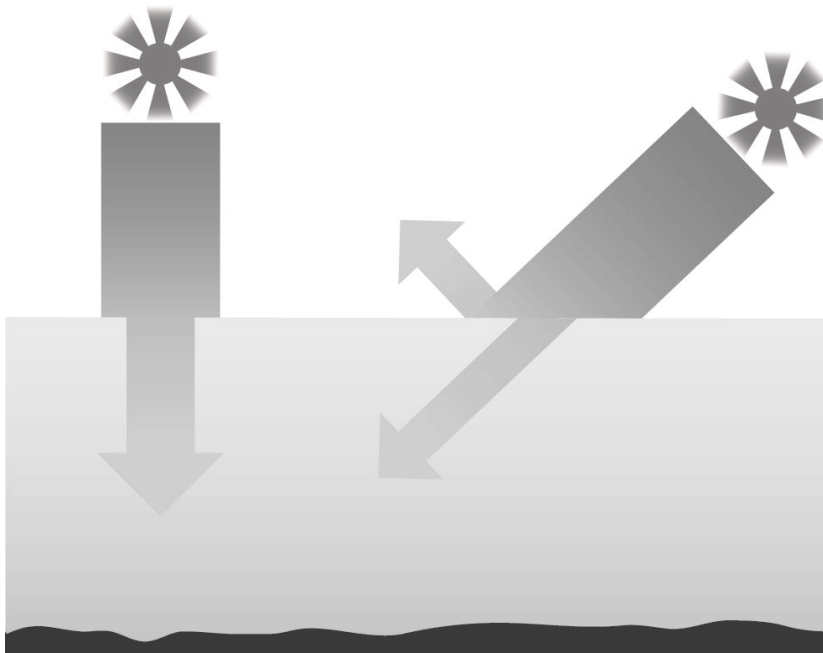
ダイバーから見た、そのままの距離をセットしましょう。

■自然光の利用

光は水を通る際に水に吸収されるために、赤、オレンジ、黄色、緑という順番に色がくすんで行き、最後に青が残ります。

青みがかった写真を避けるために、自然光ができるだけたくさん水中に入る条件を選んで撮影しましょう。

- * 午前 10 時から午後 2 時までの間、太陽光が真上からあたる時間帯に撮影しましょう。
- * 水面が荒れている時よりも、おだやかな時の方が、太陽光が水中によりたくさん入ります。
- * 曇った日より、晴れて明るい日のほうが、太陽光が水中によりたくさん入ります。
- * 深い水深よりも、浅い水深のほうが、太陽光が水中によりたくさん入ります。
- * 透明度の高い方がより多くの自然光が水中に届きます。
- * 太陽光が届きやすい浅い深度で撮影を行いましょう。



太陽光が真上からあたる日中が狙い目

■ストロボ光の利用

ストロボは水中での自然光のロスのカバーしてくれます。

ストロボ光を利用する場合には、被写体に近づけば近づくほど、被写体とカメラの間の光を吸収する水が少なくなるため、写体の色を実際に近づけることができます。

また、自然光を利用する場合でも、ストロボを使用することによって、より被写体の色を実際に近づけることができます。

カラー補正フィルターを使用し、色のバランスを補う場合もあります。



ストロボを使わないとお化けみたい

■透視度とハレーション

水中には、マリンスノーと呼ばれる微生物や細かいゴミ、巻き上がった砂や泥などたくさんの浮遊物が漂っています。

ストロボから出た光は、たくさんの浮遊物にぶつかり反射して写真に写ります。

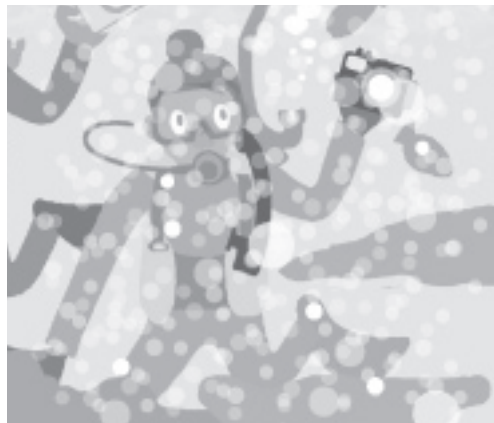
このことをハレーションと呼びます。

ハレーションを少なくするには、浮遊物の少ない透視度の高い水域で撮影を行いましょう。

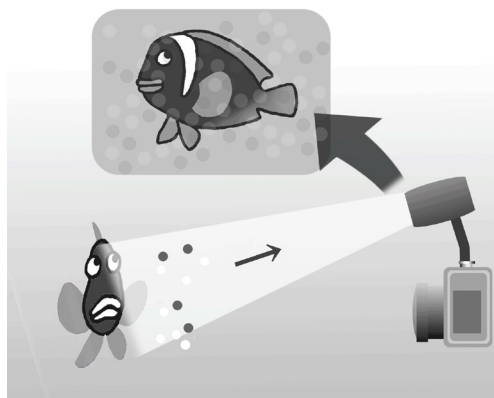
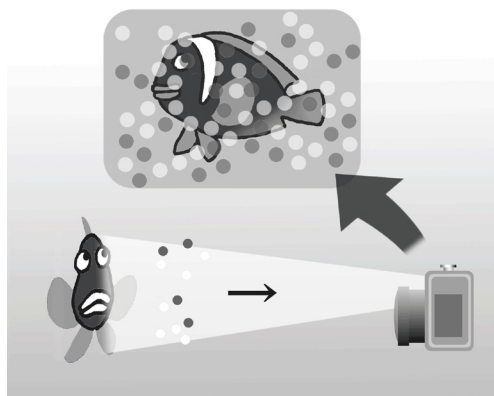
また、撮影時にはフィンなどで砂や泥を舞き上げないように注意しましょう。

デジタルカメラなどのカメラに内蔵されているストロボを使用するとストロボ光がまっすぐ発射されることによってハレーションが起これ写真に写ってしまいます。

外付けストロボを使用し照射角度をつけてストロボ光を当てることにより、ハレーションによるトラブルを軽減することができます。



ハレーションの写真



■手ブレ

写真のブレは、カメラをしっかり固定して正しく持っていなかったことによる手ブレが原因です。

特にデジタルカメラは、重量が軽い反面、ブレやすくなります。

撮影する際には、水中生物に充分注意をはらって水底に着底し、BC やドライスーツの中のエアを抜いて、体を固定させます。

シャッターを押すときは両手でカメラをしっかりとホールドして、自然な呼吸でリラックスしながら、ゆっくり確実にシャッターを押しましょう。



正しい構え方

人物の撮影

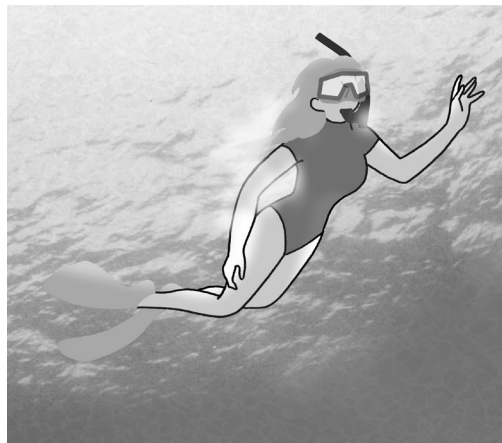
■スキンド이버

水面から水中へ潜降するスキンドイバーは、躍動的で美しい姿に撮影できます。



■シュノーケラー

水面で楽しく遊んでいる雰囲気撮影しましょう。



■バディ

バディやグループを撮影する場合は、被写体からある程度離れて撮影する必要がありますので、透明度・透視度の良いポイントで撮影しましょう。



■シルエット

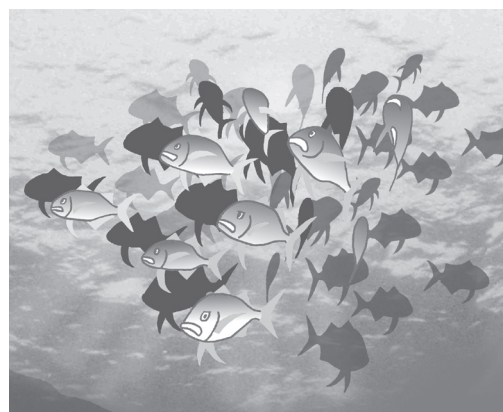
中層のダイバーを海底から撮影すると、太陽の光の中に、ダイバーのシルエットを撮影することができます。



水中生物の撮影

■魚の群れ

中層から水面に群れる大型魚の群れは、迫力のあるダイナミックな写真に撮影できます。



■隠れている生物

サンゴや岩の間、砂地にもたくさんの小魚がひそんでいます。

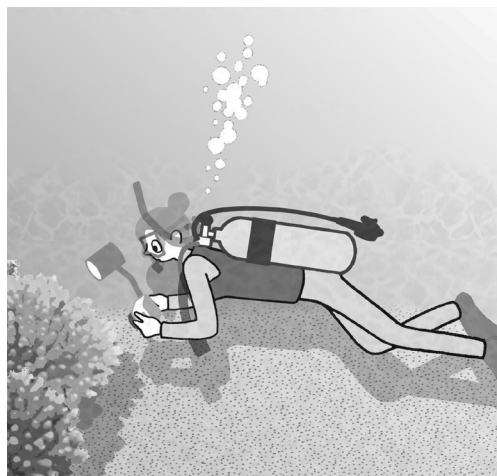
デジタルカメラで、小さな被写体にてできるだけ近づき大きく拡大して撮影するには、クローズアップ・マクロモードを使います。



マクロモードのパネル表示例

水中生物をおどかさないように注意しながら、できるだけ接近して撮影しましょう。

被写体に近づけば近づくほど、ピントが合う範囲（前後方向）は狭くなるので、ピンボケにならないよう体をしっかり固定して撮影しましょう。



できるだけ接近

また、隠れている小魚を撮影する時には、静かに近づき、姿をあらわすのを根気強く待ちましょう。



かわいらしいエビがひそんでいます



きれいなウミウシは格好の被写体です

構図

構図とは、写真の中の被写体の配置位置です。
これが良い写真を撮影するための決め手となります。

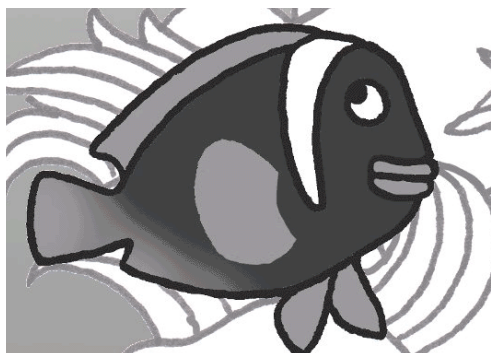
特に被写体が魚の場合は、被写体に対して少し下方向から上向きの角度で撮影します。

魚の目線に平行な位置から見上げるような感じで撮影しましょう。



被写体より少し下から撮影

被写体が、単体の魚などの場合は、画面に魚全体が入るようにしましょう。



良い例



悪い例

構図の中に被写体以外の unnecessary なものが入ると、いちばん伝えたいことが明確に伝わらなくなります。
被写体の前後左右にはできるだけ unnecessary なものを入れないようにしましょう。



何を写したいの？

- 発行 スターズ本部
 東京都文京区本郷2丁目26番14号
 電話 03-3818-6028
- 初版発行 2011年8月

※本紙掲載記事、写真、イラストの無断転載をお断りいたします。